

# 開業動機と開業医（開設者）の 実情に関するアンケート調査

定例記者会見

2009年9月30日  
社団法人 日本医師会

\* 2009年9月30日定例記者会見で配布した資料から一部変更したものを掲載しています。

## アンケート調査の目的

財政制度等審議会(以下、財政審)は、「病院勤務医の厳しい勤務環境及びそれを背景とした医師の病院離れ(開業医志向)」があると指摘している<sup>※注1)</sup>。また中央社会保険医療協議会(以下、中医協)の調査<sup>※注2)</sup>によって、病院勤務医の負担がますます増加していることが明らかになっている。

開業医については、日医総研が2007年に勤務時間および年収に関する調査<sup>※注3)※注4)</sup>を行っているが、開業後の負担に着目した調査はなかった。

そこで、病院勤務医が過重労働を主な理由として開業を志向しているのか、実際には高い志があるのではないか、また、開業医が病院勤務医に比べて時間的、精神的、経済的に恵まれていると言えるのか、その実態を把握するため、開業動機と開業医の実情に関するアンケート調査を行った。

※注1) 財政制度等審議会「平成22年度予算編成の基本的考え方について」2009年6月

※注2) 中医協・診療報酬改定結果検証部会「診療報酬改定結果検証に係る特別調査(平成20年度調査)病院勤務医の負担軽減の実態調査報告書」2009年5月

※注3) 日医総研「診療所医師の診療時間および診療時間外活動に関する調査結果(2007年7月実施)」2007年11月

※注4) 日医総研「診療所開設者の年収に関する調査・分析(2006年分)ー日本医師会 診療所に関する緊急調査ー」2008年1月

## 調査対象および回答状況

日本医師会会員のうち、医療法人または個人立の診療所および病院の開設者を対象とし、都道府県ごとに、診療所の1/20、病院の1/10を抽出した。調査票は、2009年7月28日に、診療所3,584、病院390、合計3,974に対して郵送で発送し、8月28日に回答を締め切った。

有効回答数は、診療所1,861（有効回答率51.9%）、病院123（同31.5%）である。

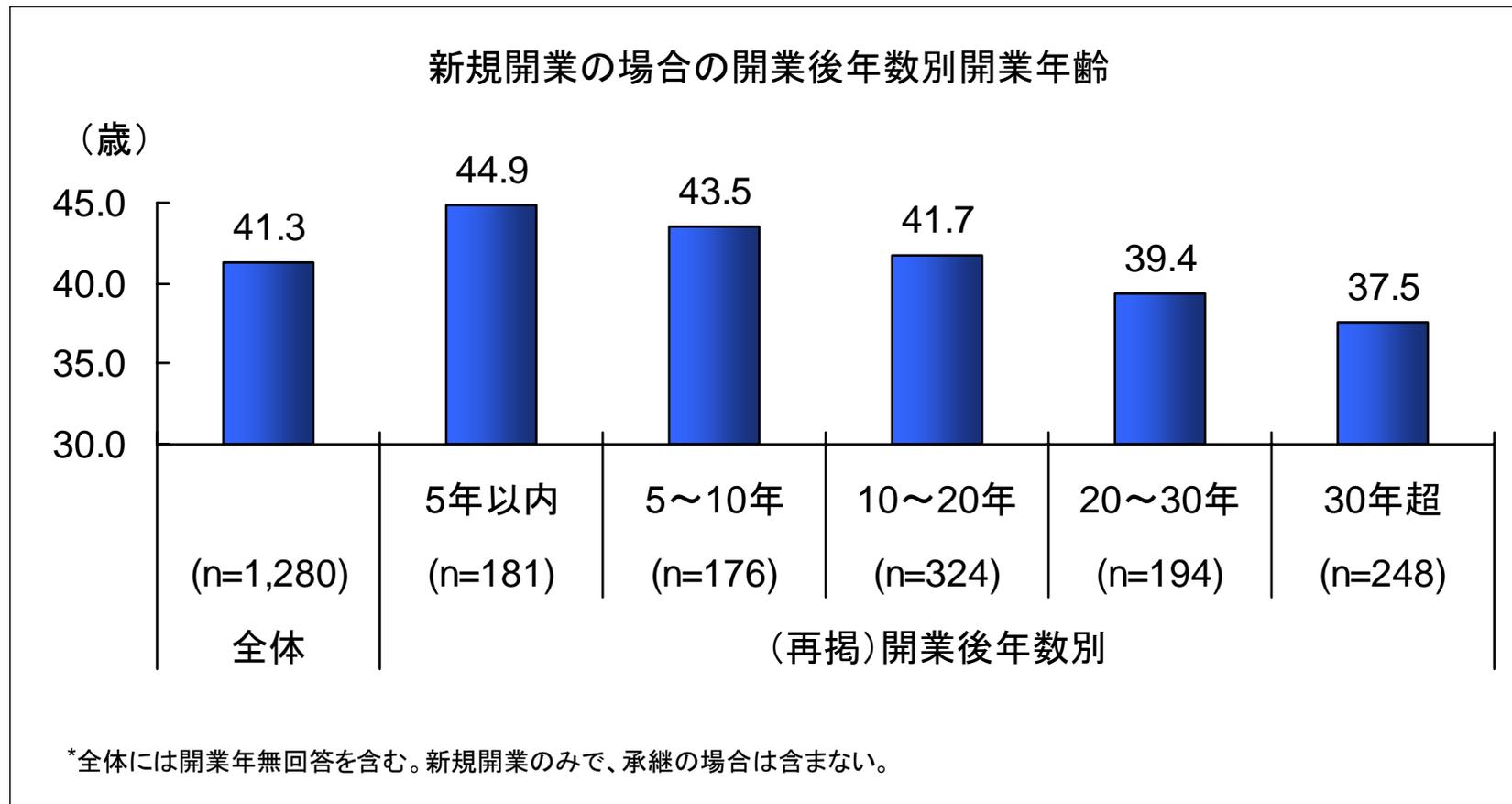
### 調査対象数および有効回答数

	診療所	病院	全体
調査対象数	3,584	390	3,974
回答数	1,863	123	1,986
有効回答数 <small>※注)</small>	1,861	123	1,984
有効回答率	51.9%	31.5%	49.9%

※注) 回答はあったものの、調査票発送と入れ違いで廃院した施設を除外した。

## 開業年齢

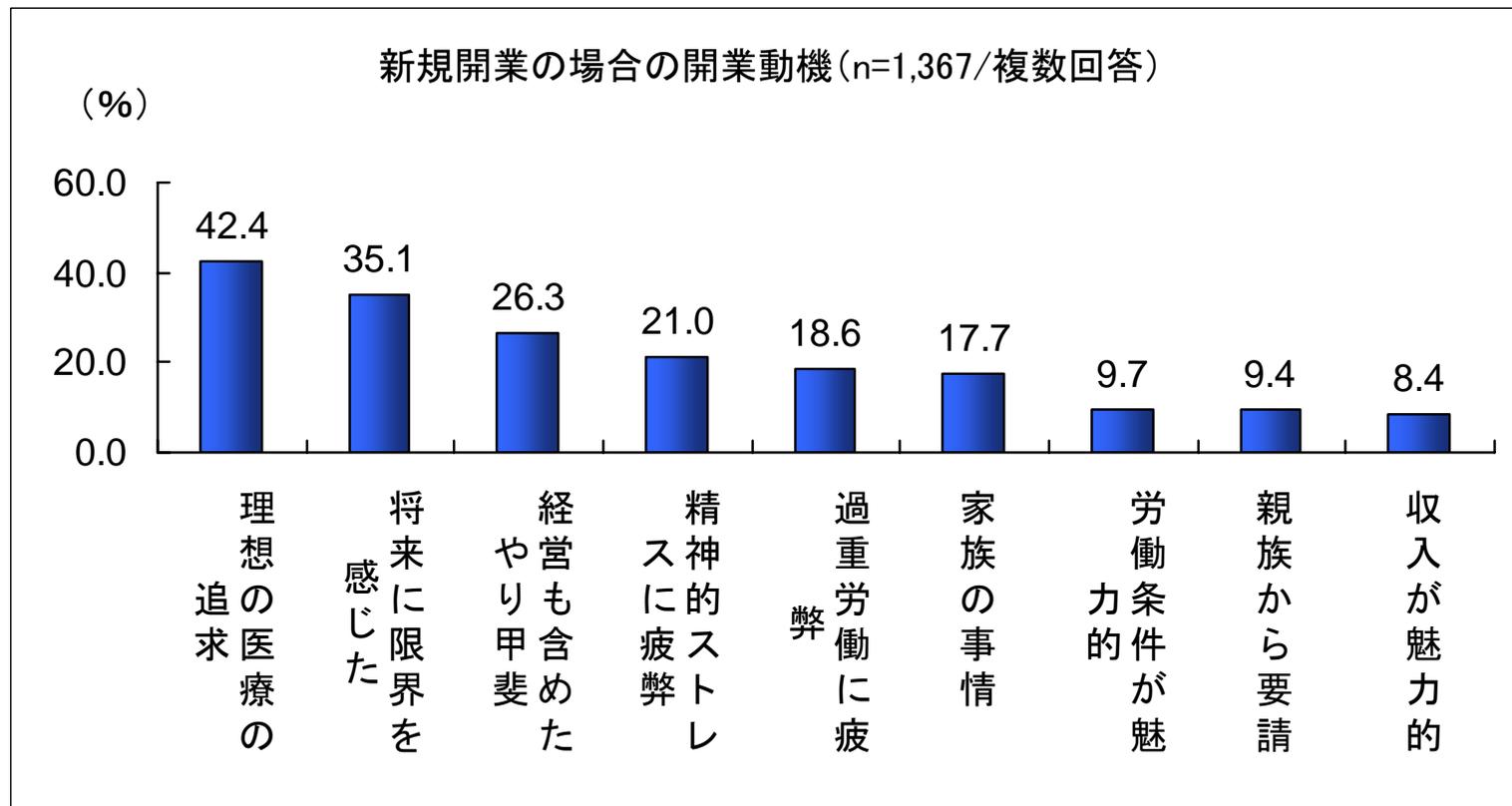
新規開業の場合、開業した年齢は平均41.3歳である。開業後年数が短いほど開業年齢が高く、最近では、病院等で一定期間のキャリアを経た後に開業しているケースが増えていると推察される。



## 開業動機

新規開業における開業動機の最上位は、「自らの理想の医療を追求するため」で42.4%であった。

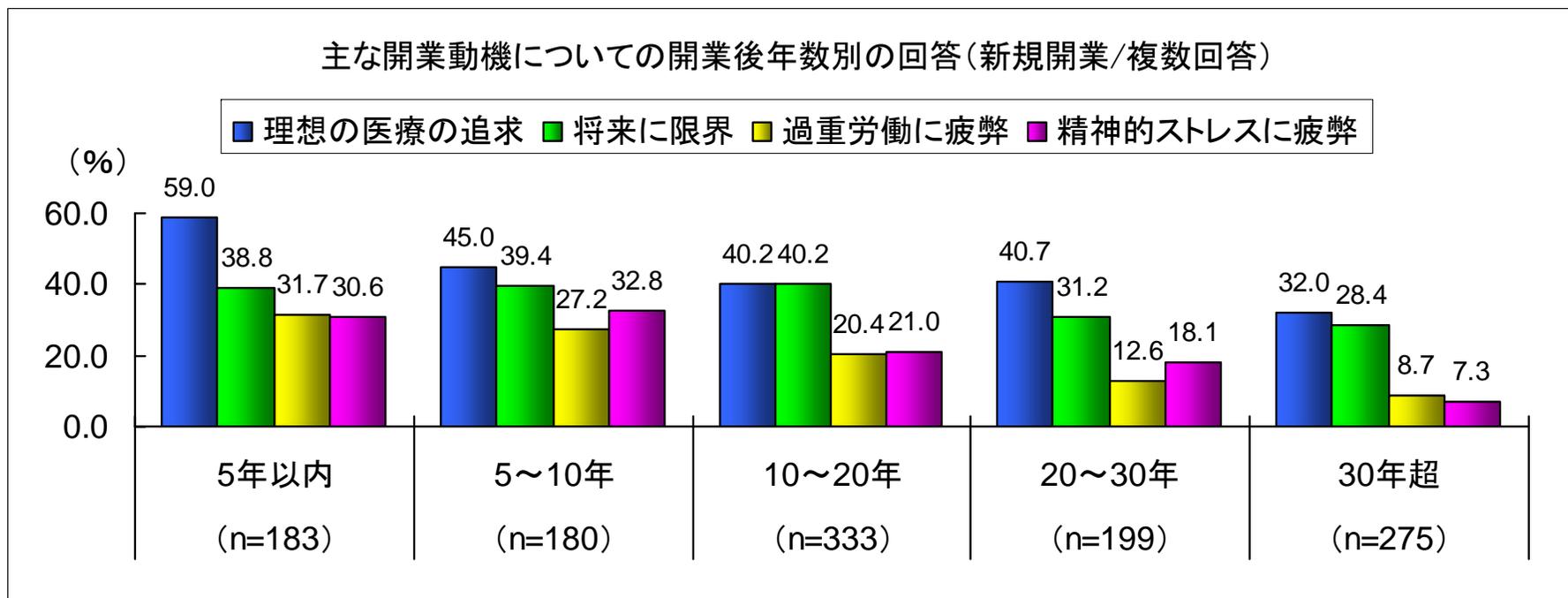
一方で、「勤務医または研究者時代の精神的ストレスに疲弊したため」が21.0%、「勤務医または研究者時代に過重労働に疲弊したため」が18.6%と、病院勤務医の労働環境の厳しさを背景とする開業も約2割あった。



## 開業後年数別の開業動機

新規開業の場合、最近の開業ほど、過重労働や精神的なストレスに疲弊したためという回答が多く、あらためて勤務医の過重労働が浮き彫りになった。

一方、どの年齢階級においても、「理想の医療の追求」が突出している。過去に開業した場合にはこの記憶がやや薄れてしまっている可能性もあるが、開業後5年以内では6割近くに達している。



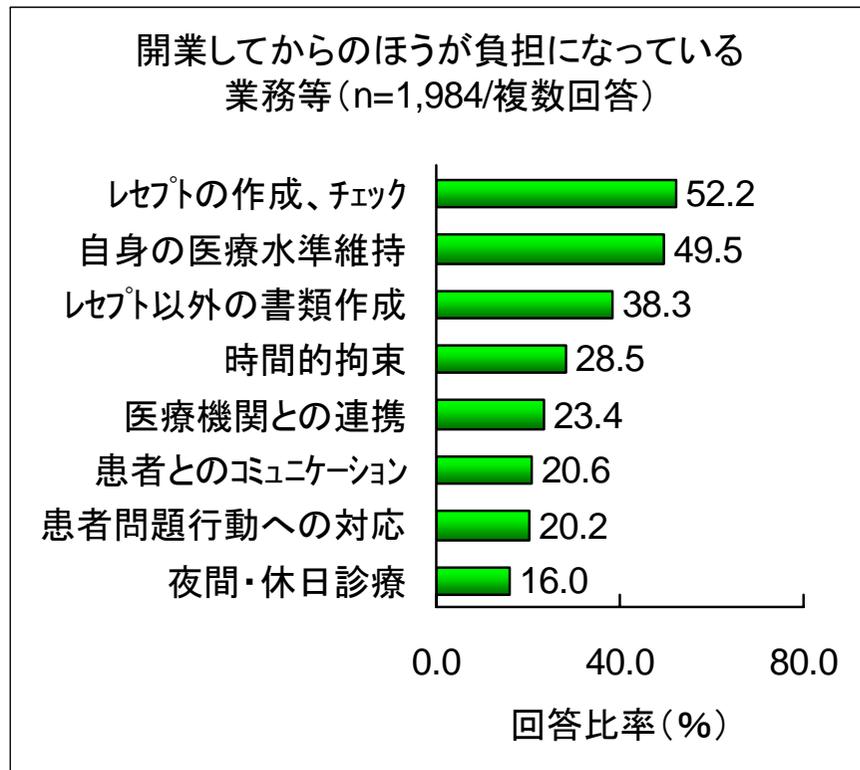
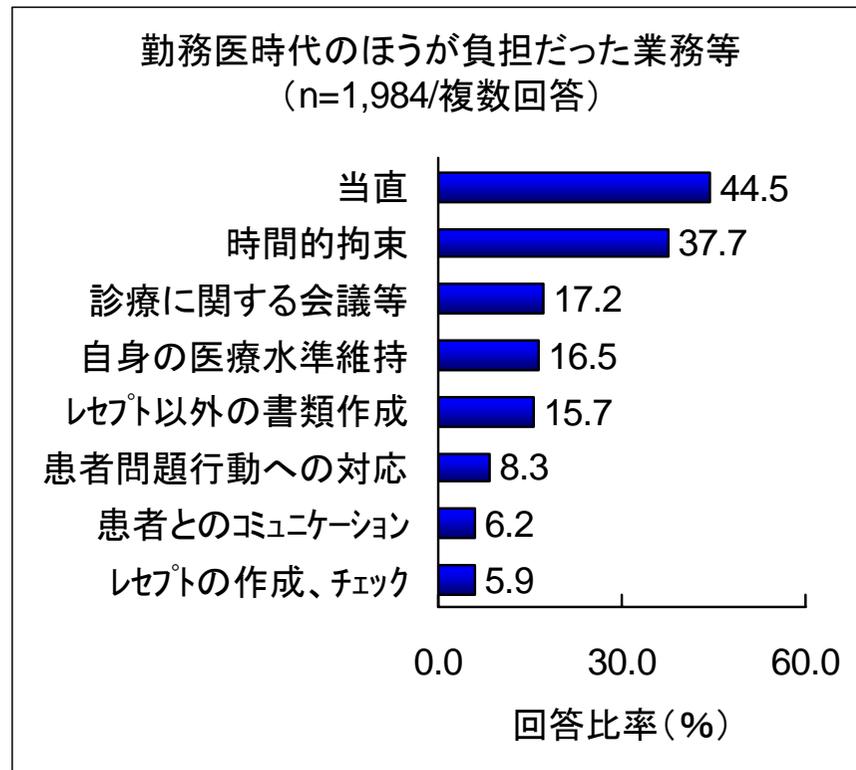
補足：2009年6月15日付の産経新聞には、「医師会調査でも勤務医が開業医になりたい主な理由は『激務が給料に反映されない』だった」との記事が掲載された。正しくは中医協の調査※注)であるが、「できれば開業したい」と回答した病院勤務医が5.7%あり、このうち30.6%が、開業理由として「激務が給料に反映されない」を、20.4%が「体力的にきつい・疲れ果てた」を選択している。今回の調査でも、過重労働や精神的ストレスに疲れたという回答が、開業後5年以内で3割以上あったが、「理想の医療を追求したい」という回答は、これをはるかに上回っている。

※注) 既出「診療報酬改定結果検証に係る特別調査(平成20年度調査)病院勤務医の負担軽減の実態調査報告書」

## 勤務医時代の負担・開業後の負担－診療面－

診療面で勤務医時代に負担だった業務等では、「当直」が44.5%、「時間的拘束(当直以外)」が37.7%であり、上位2項目は、深刻な過重労働を示すものであった。これに対し開業医では、「夜間・休日診療」は16.0%に止まるが、「時間的拘束」は28.5%あった。

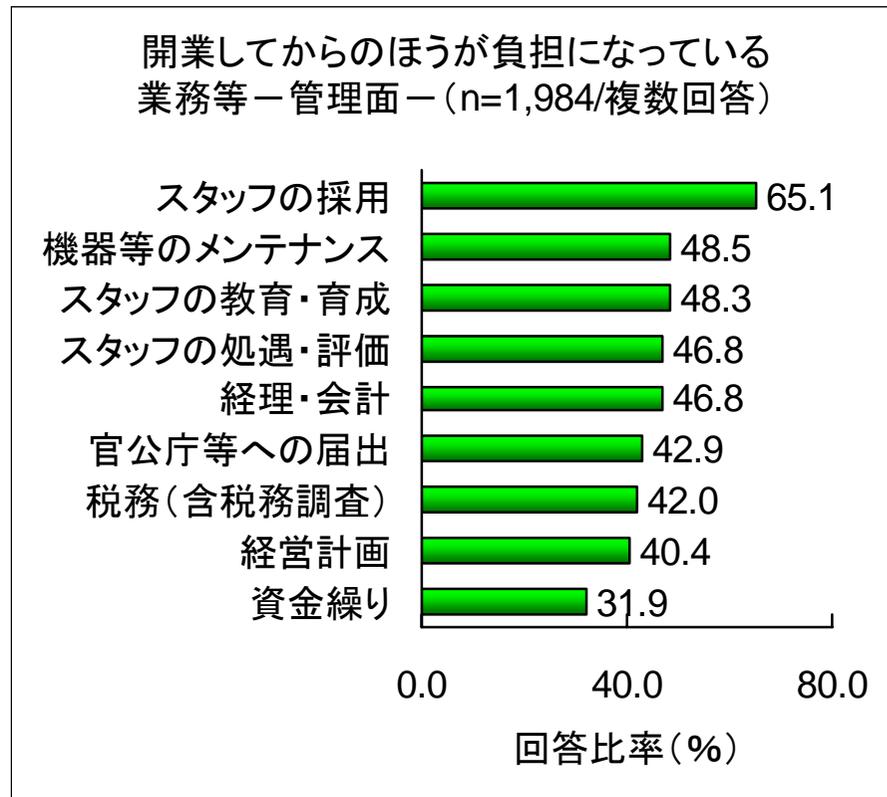
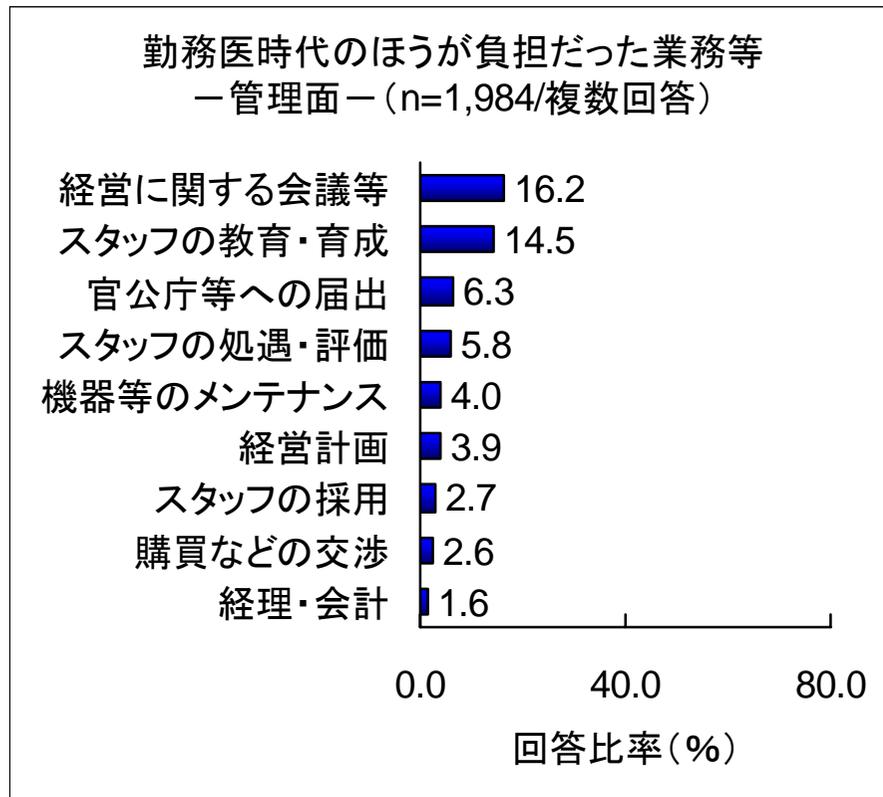
開業後に負担になっている業務等では、「レセプトの作成、チェック」が52.2%でもっとも多い。ついで「自身の医療水準の維持」の49.5%である。医療水準の維持は、勤務医時代に負担だったという回答もあるが、開業後は、約半数の医師が医療の高度化等への対応に苦慮している。



## 勤務医時代の負担・開業後の負担－管理面－

管理面で勤務医時代に負担だった業務等の最上位は、「経営に関する会議等」の16.2%である。おそらく、管理職であると推察されるが、診療の間に会議に出席することが負担と感じられている。

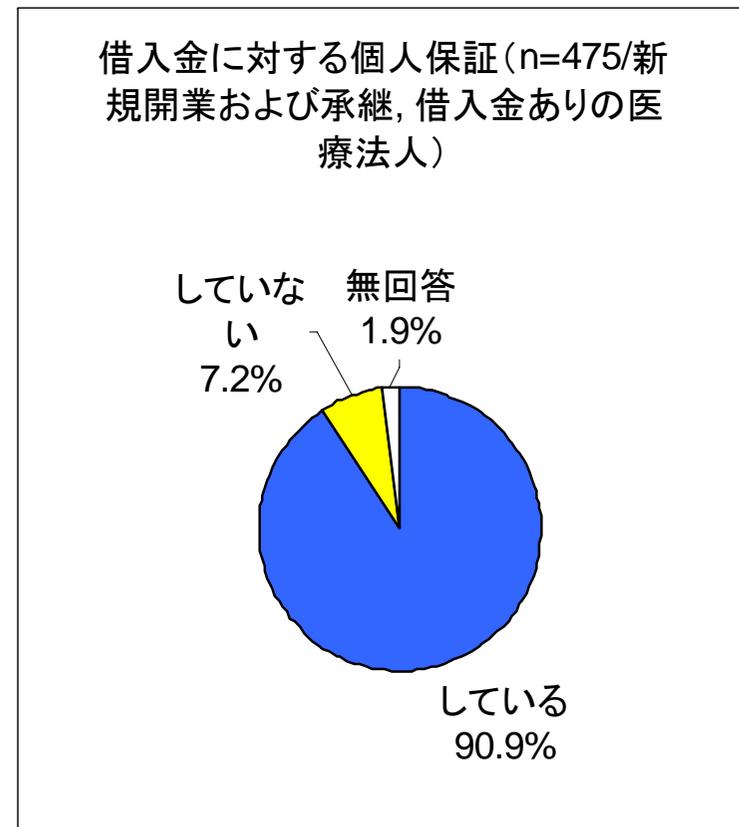
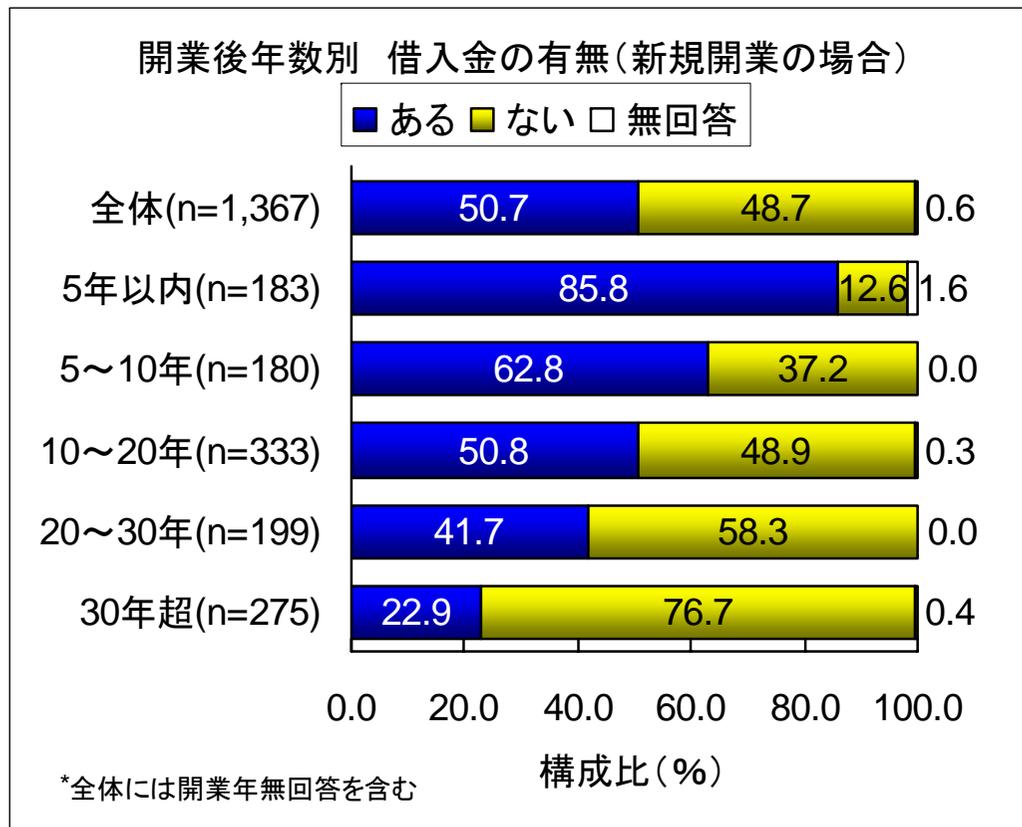
開業後に負担になっている業務等では、「スタッフの採用」が65.1%である。自由記述欄にも人事に苦勞しているとの記述が多い。また、「経理・会計」および「税務」が4割以上、「資金繰り」が3割強あり、勤務医時代には経験のない経営管理業務が大きな負担になっている。「スタッフの教育・育成」等は、勤務医時代に負担だったという回答もあるが、開業後はその比ではない。



## 開業医の負担－借入金－

開業後長期間を経ている施設が多いこともあり、新規開業全体では「借入金あり」は50.7%である。しかし開業後5年以内では、借入金ありの比率は85.8%と高い。

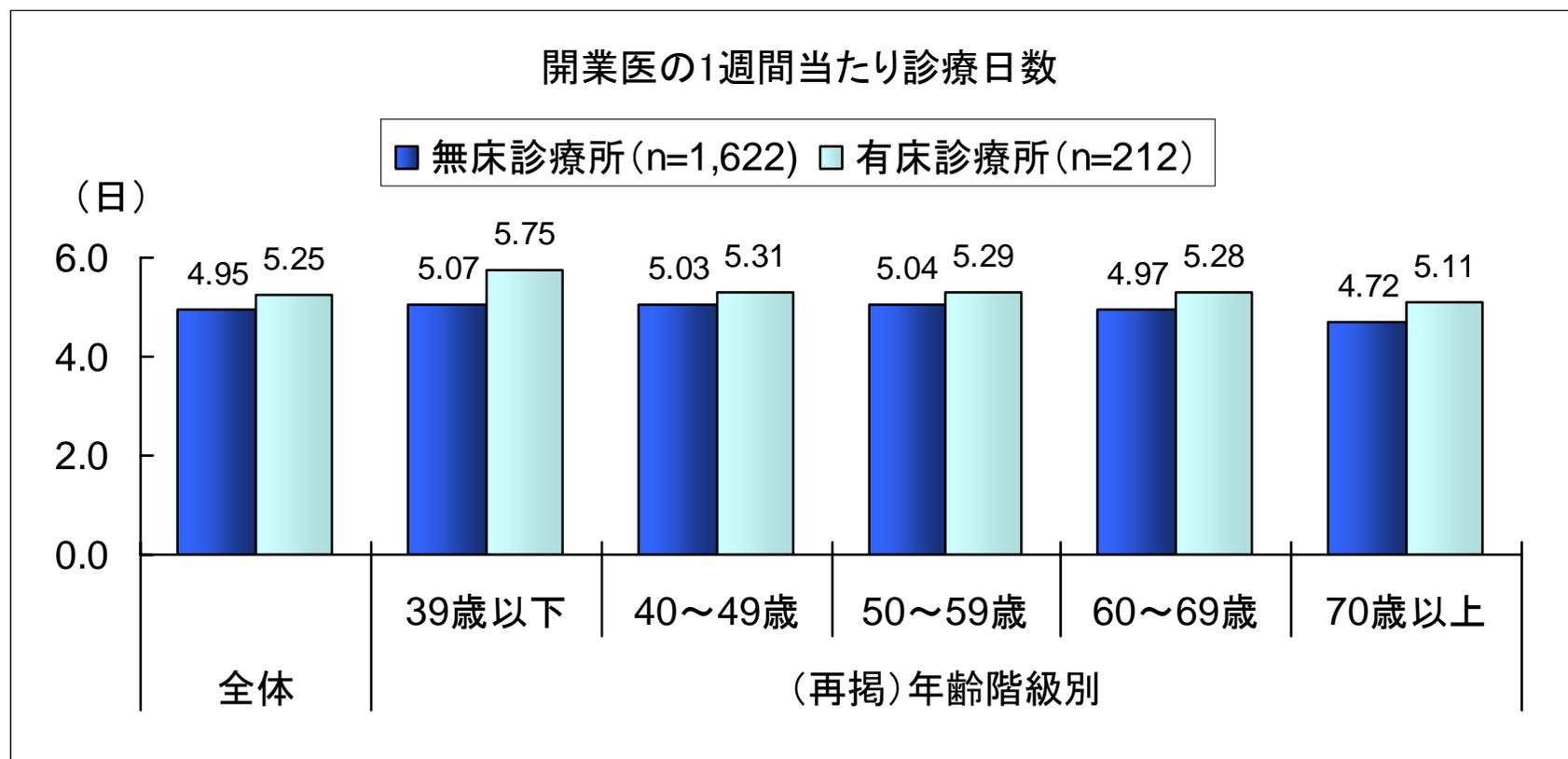
また、「借入金あり」の医療法人(新規開業・承継の両方)の9割で個人債務保証をしているとの回答であった。



## 開業医の診療日数

過去に、「開業医は週休2.5日」との記事もあった※注)。しかし、今回の調査によれば、無床診療所開業医は週4.95日診療し、診療をしていないのは2.05日であった。高齢の開業医の診療日数が5日未満のため、平均値が5日を下回っているが、50歳代までは、週5日以上診療している。有床診療所開業医は週5.25日診療し、すべての年齢階級で週5日以上診療している。

また通常の診療に加えて、開業医は、夜間診療や往診、地域医療活動も行っている。

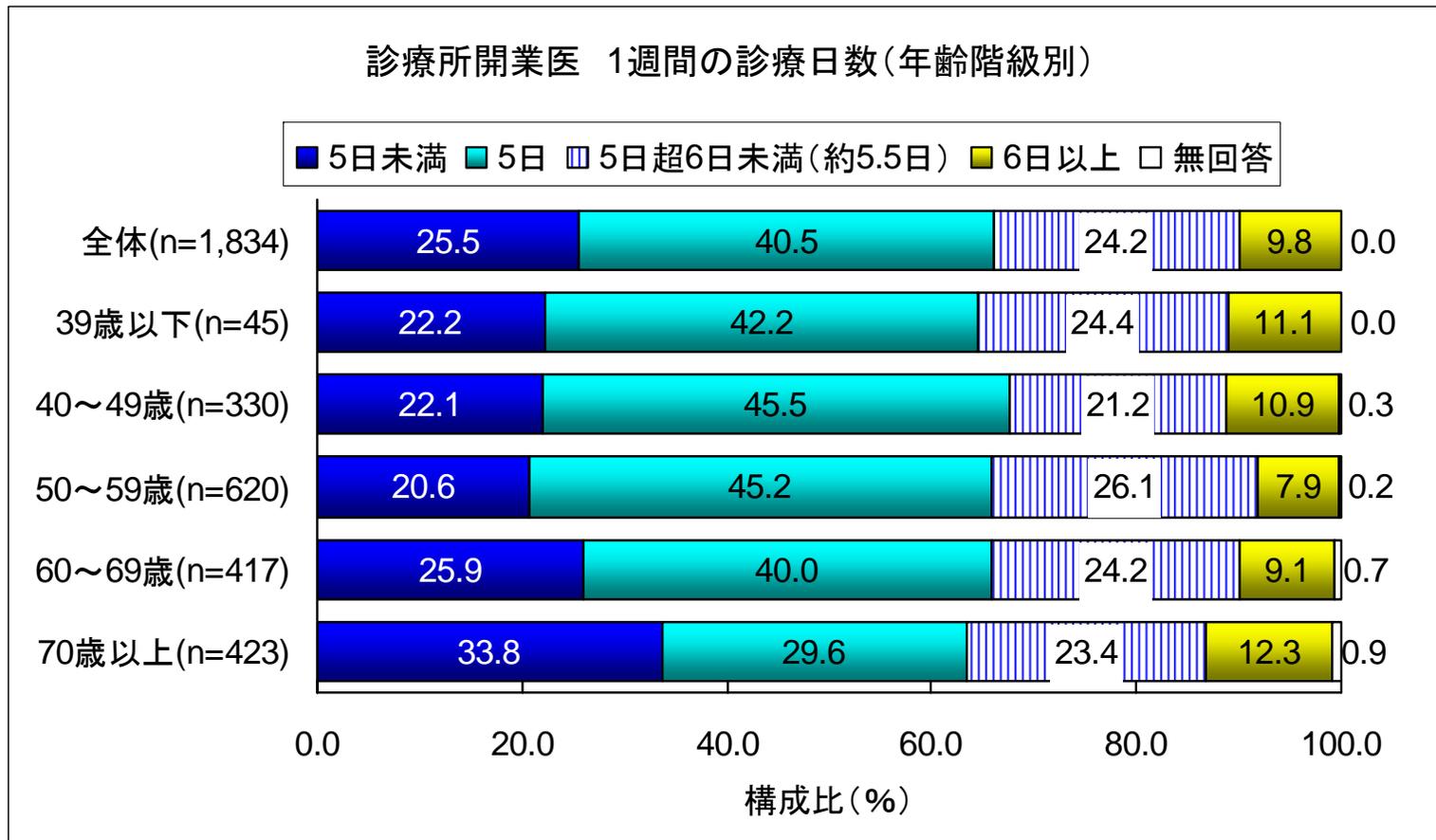


※注) 2009年6月15日付産経新聞

## 診療所開業医の診療日数

診療所開業医について見ると、週5日以上診療している開業医が74.5%であった。

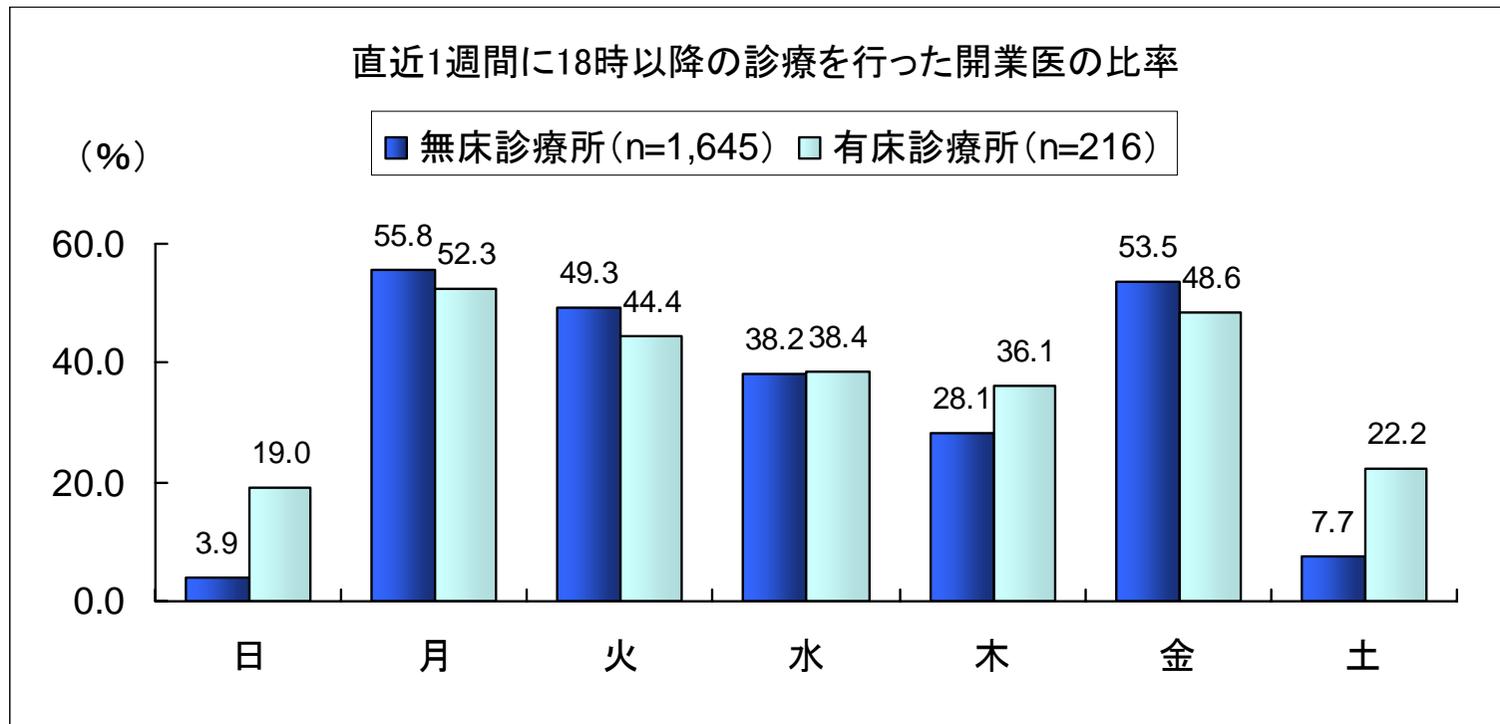
年齢階級別では、39歳以下で「6日以上」が11.1%、40～49歳で「6日以上」が10.9%あり、40歳代以下の1割強は、診療をしていない日数が週に1日以下であった。また診療をしていない日であっても、地域医療活動などを行っている。



## 開業医の夜間診療

直近1週間に18時以降の診療を行った開業医<sup>※注)</sup>は、無床診療所では、月曜日、金曜日に半数以上あった。火曜日、水曜日、木曜日の比率はやや低いが、これらの曜日には午後は診療の受付を行わず、往診や地域医療活動などを行っているためと推察される。

有床診療所開業医では、月曜日、金曜日が5割前後であるほか、土日にも約2割が18時以降に診療していた。

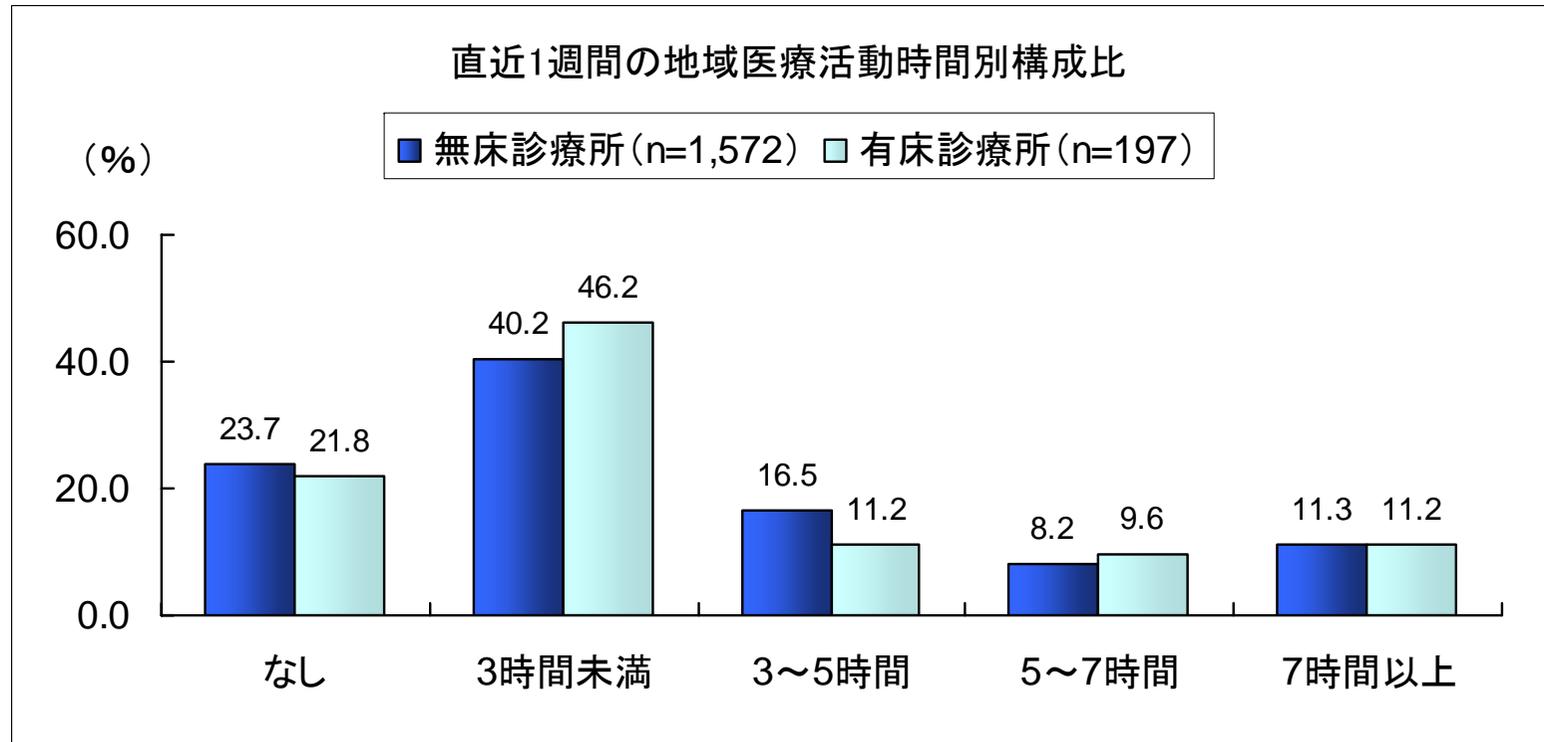


※注)「最近1週間で、18時以降に診療された曜日をすべて○で囲んで下さい」という質問であり、表示時間を示すものではない。18時以降を表示診療時間としている診療所は、厚生労働省「平成17年医療施設調査」によると、日曜日1.2%、月曜日26.3%、火曜日23.7%、水曜日19.7%、木曜日13.7%、金曜日26.1%、土曜日3.7%。

## 開業医の地域医療活動

無床診療所開業医の76.3%が地域医療活動※注)に携わっており、週5時間以上(平日1日当たりで考えると毎日1時間以上)も19.5%あった。

有床診療所開業医は78.2%が地域医療に携わっており、週5時間以上が20.8%と2割を超えていた。



※注) 地域医療活動: 学校医・園医活動、産業医活動、乳幼児健診、予防接種、がん・成人病検診、平日夜間救急センターなどへの出務、介護保険認定審査会、自治体の会議・委員会、医師会、医会、地域行事など

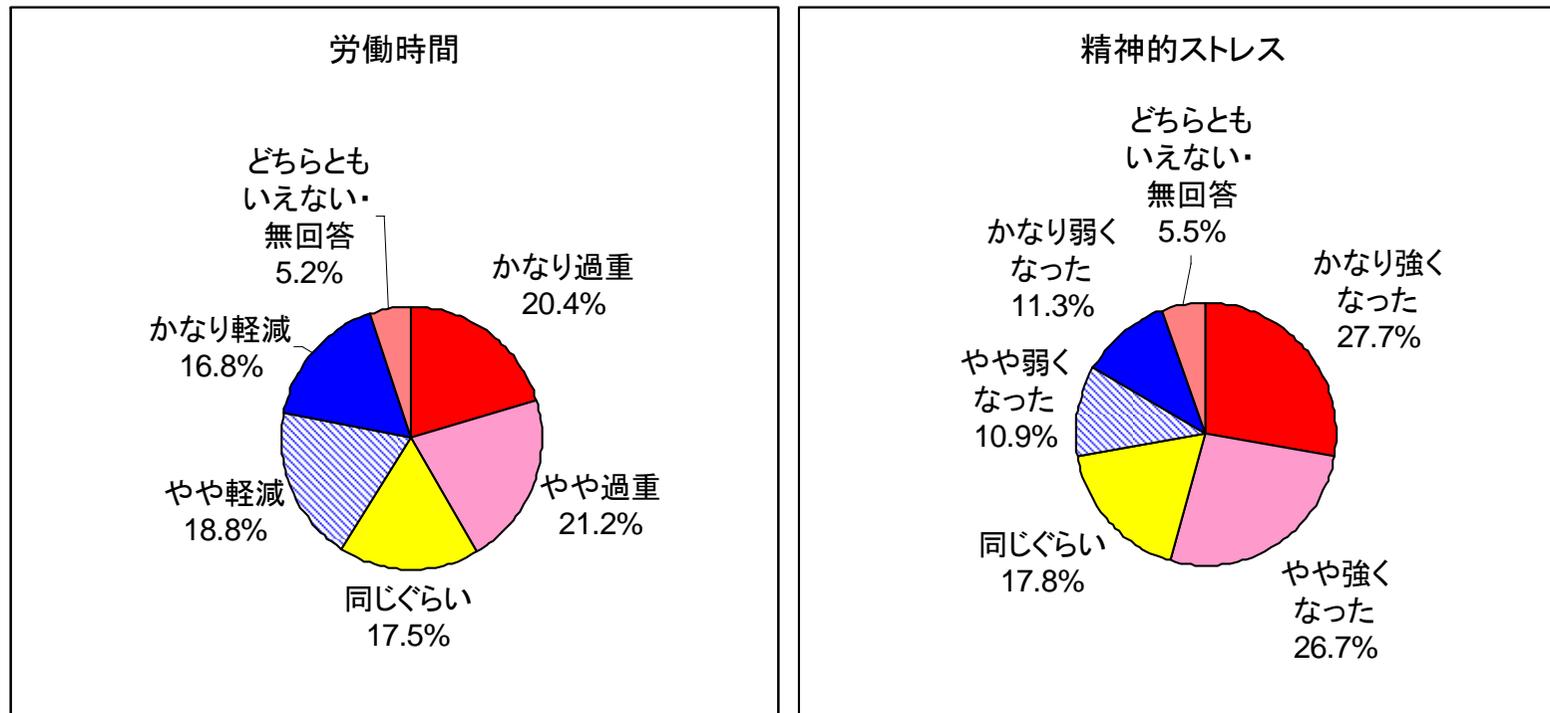
補足: 日医総研「診療所医師の診療時間および診療時間外活動に関する調査結果(2007年7月実施)」においても、1週間の地域医療活動時間は平均3.8時間(活動なしを含む平均)であった。

## 開業医の過重労働・精神的ストレス

開業後、労働時間が「過重になった」(かなり過重・やや過重)という回答が約4割あった。先に示したように勤務医時代のほうが、当直などの時間的拘束の負担が大きかったという回答が多いが、開業後、それらが解消されたとは実感されていない。

精神的ストレスは、「強くなった」(かなり強くなった・やや強くなった)が54.4%あり、半数以上が開業後の精神的ストレスの増加を感じていた。開業医の疲弊も看過できない。

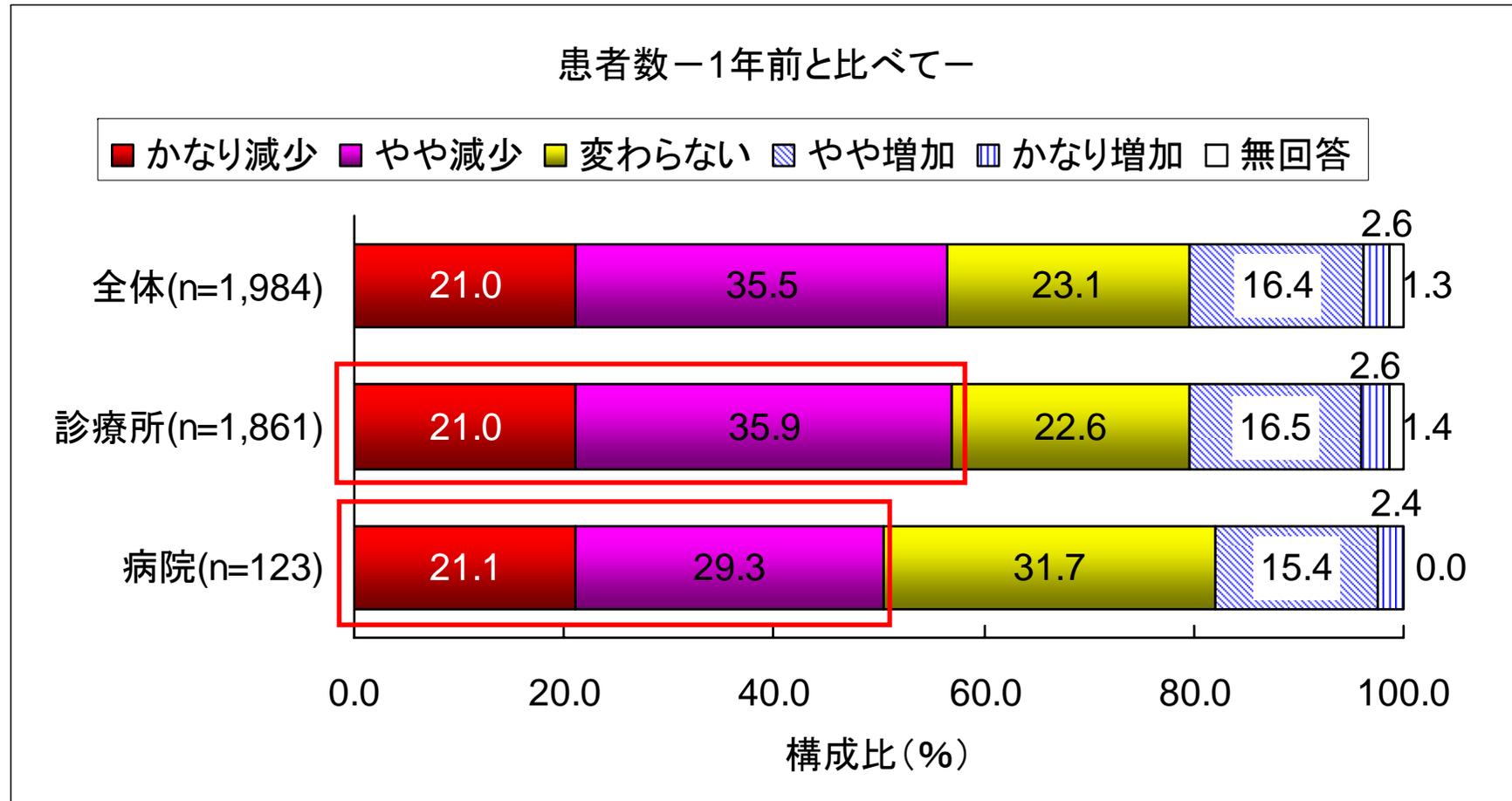
開業された現在、勤務医や研究者時代と比べて、  
過重労働やストレスはどの程度ですか(n=1,984)



## 経営状態－1年前と比べた患者数の変化－

診療所では、「かなり減少」が21.0%、「やや減少」が35.9%であり、6割近く(57.0%)で患者数が減少していた。

病院では、「かなり減少」は21.1%と診療所とほぼ同じであったが、「やや減少」は29.3%で診療所よりやや少なく、患者数が減少した病院は50.4%とほぼ半分であった。



## 経営状態－1年前と比べた患者数および利益の変化－

患者数が減少し、かつ利益が悪化した施設は、診療所の54.6%、病院の39.0%であった。診療所も病院も深刻であるが、診療所のほうが、患者数の減少がより利益の悪化に直結していることが浮び上がった。

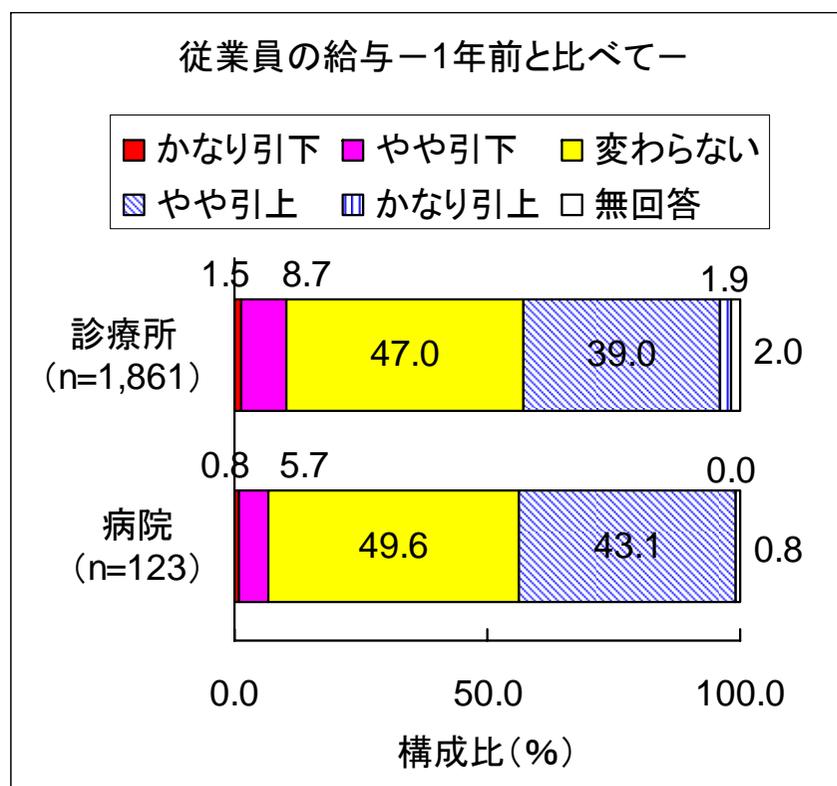
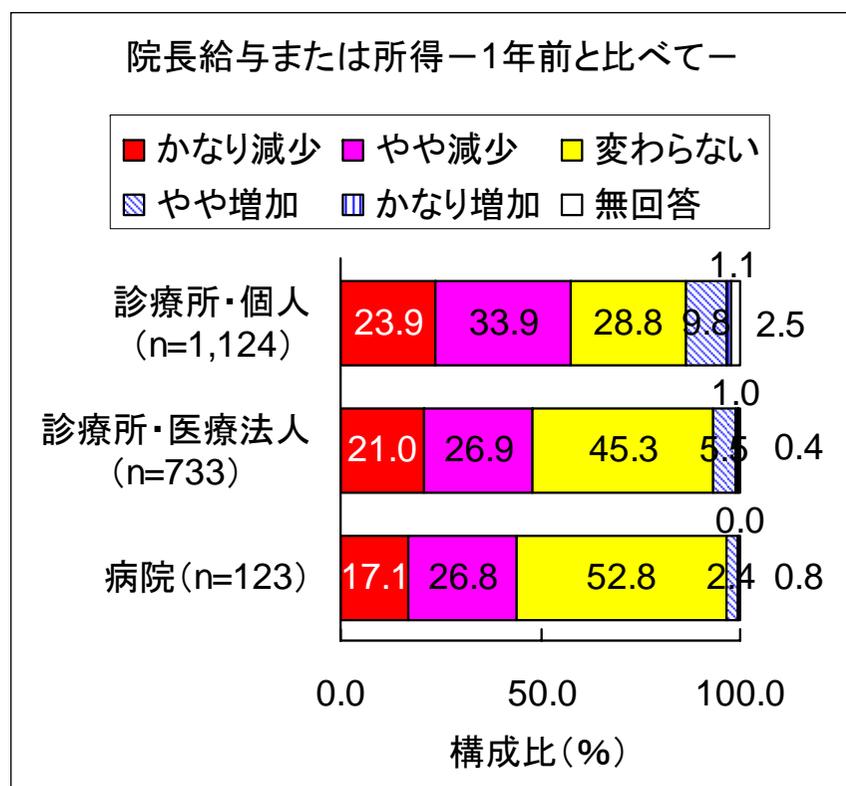
		診療所 (n=1,829)					病院 (n=123)		
利益 (損失)	好転	0.0%	0.8%	13.9%	利益 (損失)	好転	1.6%	4.9%	9.8%
	変化なし	3.2%	14.7%	4.2%		変化なし	9.8%	10.6%	4.9%
	悪化	54.6%	7.4%	1.2%		悪化	39.0%	16.3%	3.3%
		減少	変化なし	増加			減少	変化なし	増加
患者数					患者数				

患者数 減少:「かなり減少」「やや減少」、変化なし:「変わらない」、増加:「かなり増加」「やや増加」  
 利益(損失) 悪化:「かなり悪化」「やや悪化」、変化なし:「変わらない」、好転:「かなり好転」「やや好転」

## 経営状態－1年前と比べた給与の変化－

個人診療所の院長所得は、医業収支差に直接左右されるが、「減少」(かなり減少・やや減少)が6割近い。医療法人の診療所の院長給与は、自発的に給与を引き下げなければ減少しないが、「減少」が半数近くである。病院も「減少」が4割強である。

従業員の給与については、「引き上げた」(かなり引き上げ・やや引き上げ)が、診療所、病院ともに4割を超えている。従業員の給与は、年齢や勤続年数によって決まる要素が大きく、経営状態にかかわらず、毎年昇給していることがうかがえる。

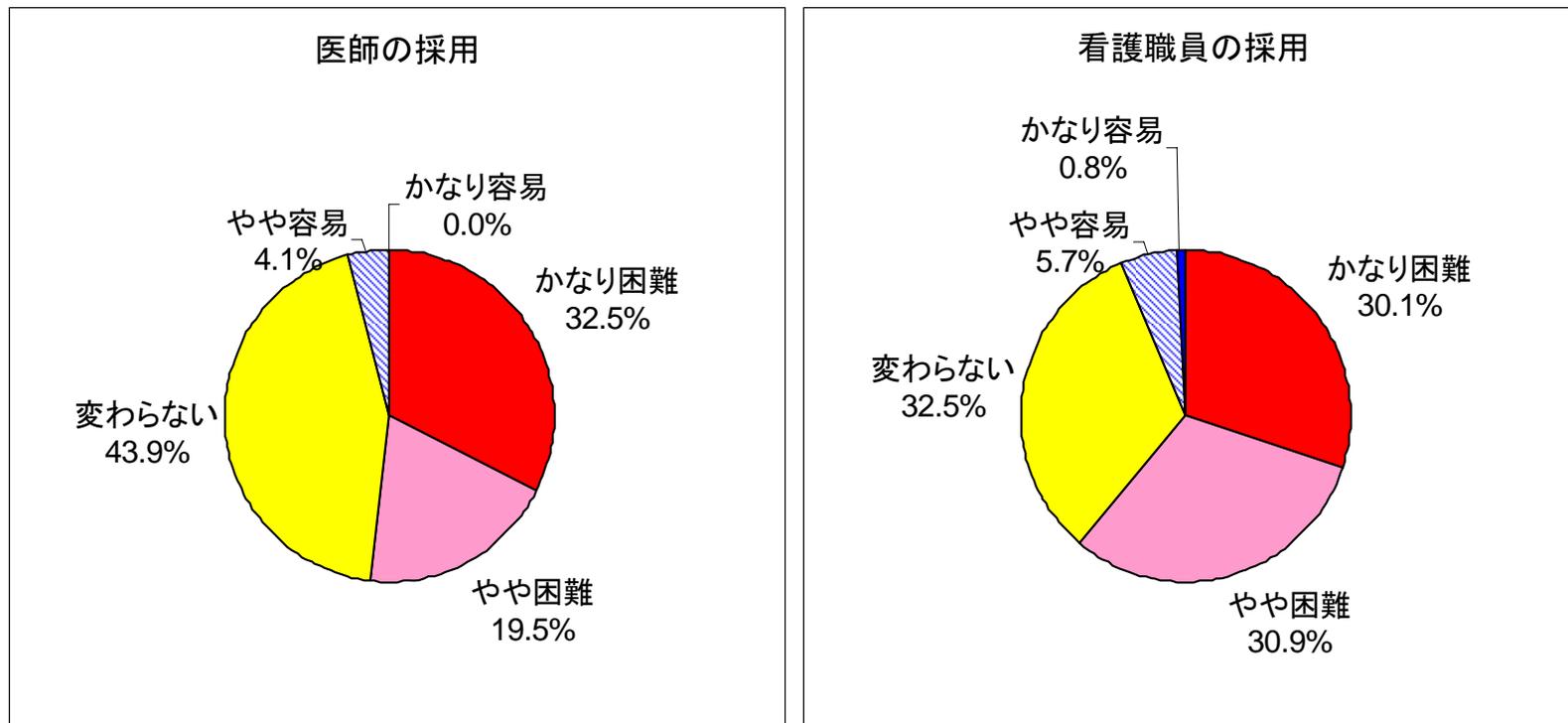


## 経営状態－1年前と比べた医師・看護職員の採用(病院)－

病院における医師の採用は、「かなり困難になった」が32.5%で、約3分の1の病院で医師の採用が依然として大きな問題である。「やや困難になった」を加えると、「困難になった」は半数強である。

看護職員の採用については、「かなり困難になった」が30.1%で3割あり、「やや困難になった」と合わせると、約6割で採用が困難な状況にある。

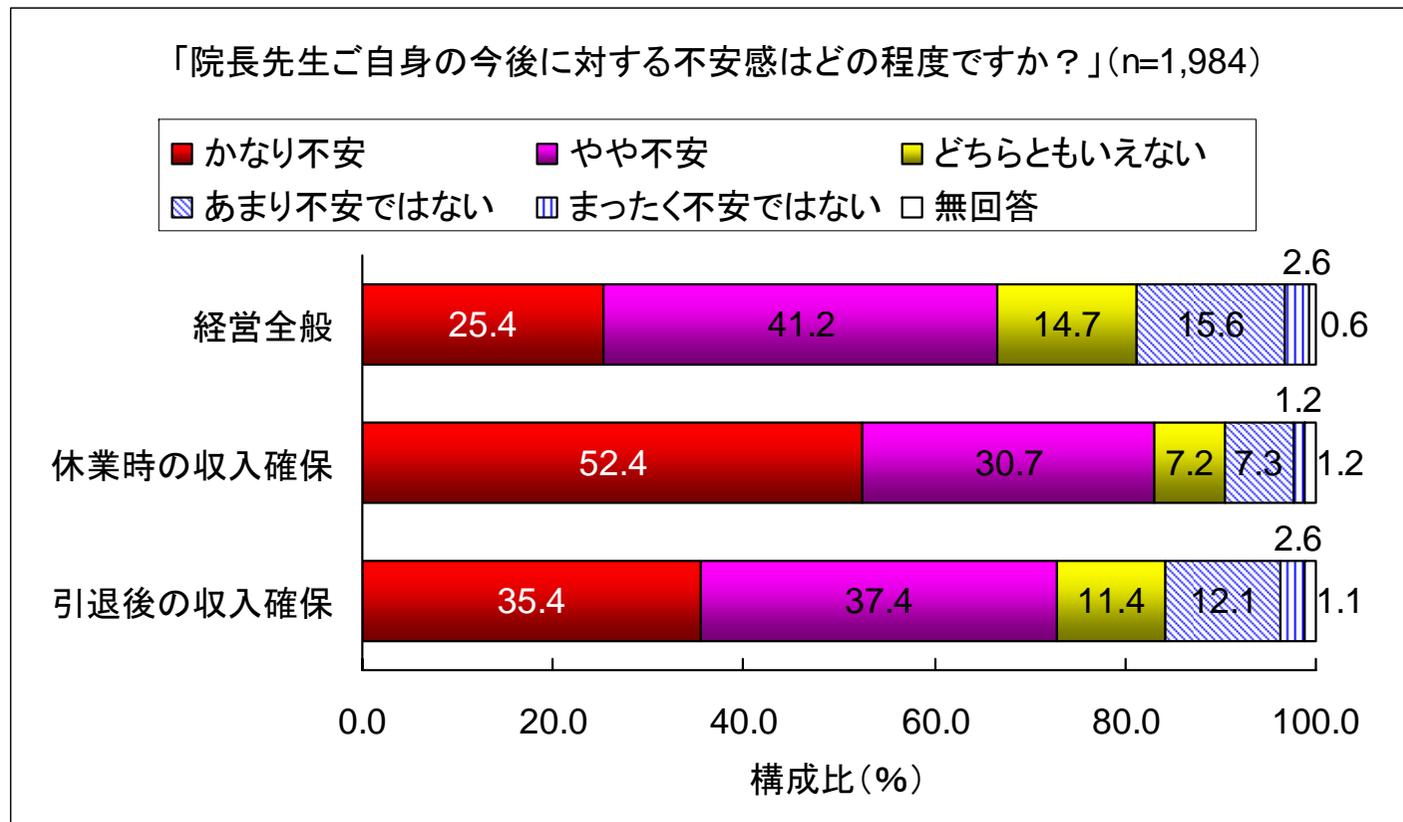
病院における医師・看護職員の採用(n=123)



## 開業医の不安

今後については、「経営全般」に対する不安(かなり不安・やや不安)が66.5%あり、経営への不安が7割近くあった。

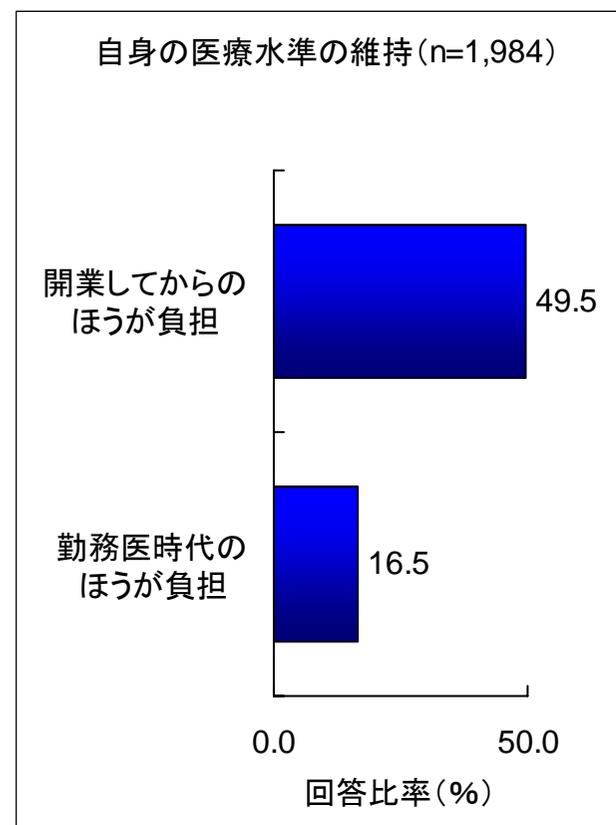
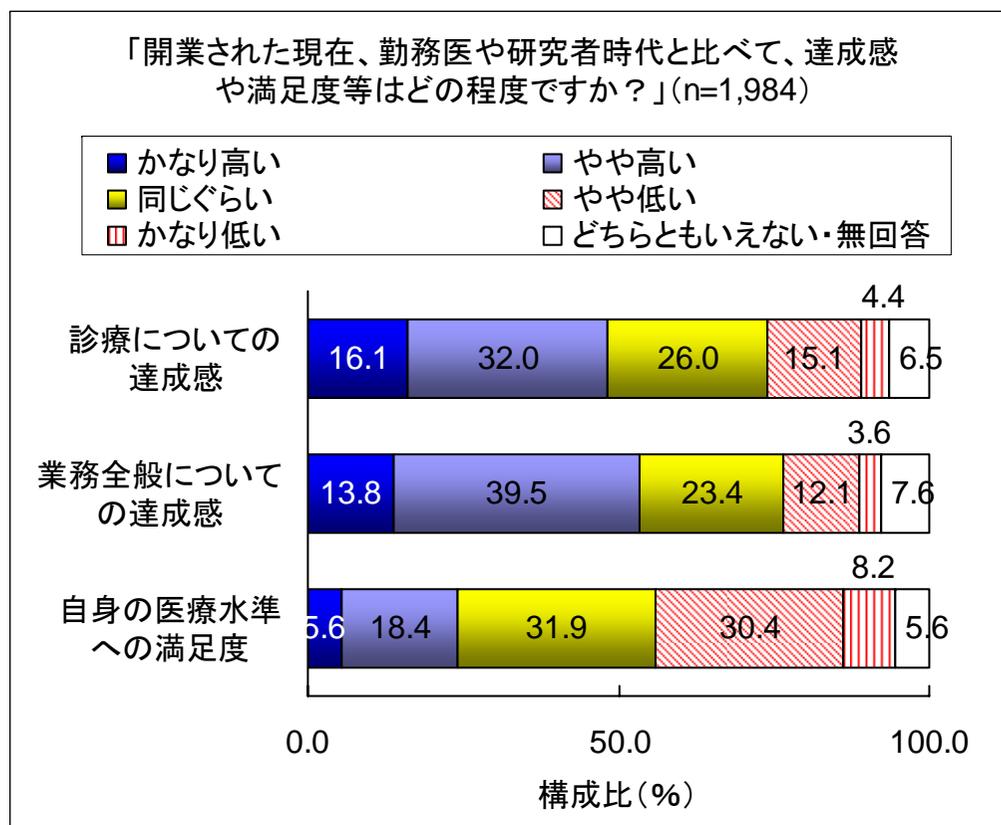
また、「休業時の収入確保」を不安とする回答が83.2%あり、休業補償のない開業医の不安感が大きく浮かび上がった。「引退後の収入確保(年金や退職金)」が不安という回答も72.8%あった。



## 開業医の医師としての苦悩

診療についての達成感は、「高い」(かなり高い・やや高い)が48.1%、業務全般についても「高い」が53.3%であり、達成感を感じているのはおおむね半数程度であった。しかし、自身の医療水準の満足度については、「低い」(かなり低い・やや低い)が38.6%あり、「高い」を上回った。求める水準が高いこともあるためと推察されるが、開業医の4割近くが医療水準に満足していない。

また、勤務医時代にも「自身の医療水準の維持」が負担だったという回答が16.5%あるが、開業後に負担であるとの回答は49.5%で半数近くに達していた。



## まとめ

### 開業の背景

財政審は、「病院勤務医の厳しい勤務環境及びそれを背景とした医師の病院離れ（開業医志向）」を指摘している。最近では開業年齢が高まってきており、若い頃から開業を目指しているのではなく、キャリア途上で疲弊し、開業を志向しているケースもあると推察される。しかし、最近5年以内に新規開業した開業医の6割は「自らの理想の医療を追求するため」に開業した前向きな開業である。

一方で、最近5年以内に新規開業したケースでは、「過重労働に疲弊したため」、「精神的ストレスに疲弊したため」という回答もそれぞれ3割を超えており、病院勤務医の厳しさがあらためて浮かび上がった。

### 勤務医の負担・開業医の負担

診療面で、勤務医時代に負担であったという回答の上位は、「当直」が44.5%、「時間的拘束（当直以外）」が37.7%であり、深刻な過重労働を示していた。これに対し開業医では、「夜間・休日診療」は16.0%に止まるが、「時間的拘束」は28.5%であった。

開業後には、経営負担がのしかかる。最大の課題は「スタッフの採用」である。「経理・会計」および「税務」が負担であるという回答も、それぞれ4割以上、「資金繰り」も3割強あり、勤務医時代には経験のない経営管理業務が大きな負担になっている。

借入金も約半数の開業医が負っており、特に新規開業で、開業5年以内の開業医では、「借入金あり」は85.8%である。さらに医療法人の場合、「借入金あり」の開業医の約9割が個人保証を行っている。

## 開業医の疲弊

病院勤務医は疲弊している。本調査でも、勤務医時代に負担だった業務等の上位は、「当直」、「時間的拘束(当直以外)」であった。

一方で、開業医は、週休2日以上と言われているが、40歳代以下の1割強では診療していない日数は週に1日以下であり、夜間診療や地域医療活動も行っている。その結果、勤務医や研究者時代と比べて、労働時間が「過重になった」という回答が約4割、精神的ストレスが「強くなった」という回答が半数強あり、開業医も疲弊している。そして、「休業時の収入確保」に不安を感じている開業医も8割を超えている。

自由記述欄にも、「開業してからは全て自分1人にかかるので『休み』をとることも『学会』に参加することも思うようにできない」「病気になっても休めない」などの記述もあった。

## 経営状態の悪化

経営状態もますます悪化している。診療所では、1年前と比べて患者数が減少した施設、経営全般が悪化した施設、利益が悪化した施設が、いずれも約6割あった。このような経営状態を踏まえて、診療所開業医の半数強は自らの給与を引き下げているが、医師不足、看護師不足もあり、診療所、病院ともに約4割で従業員の給与を引き上げざるを得ない事態である。

## 開業医の医師としての苦悩

自由記述欄から、開業医が勤務医にはない経営責任を負い、かつ孤独であるということが強く感じられた。さらに医師の場合の切実な問題は、医療水準の維持である。

勤務医時代にも医療水準の維持が負担だったという回答が16.5%あるが、開業後に負担になっているとの回答は49.5%で半数近い。また、開業後の「自身の医療水準の満足度」については、「高い」が24.0%、「低い」が38.6%であり、「低い」が「高い」を上回った。

開業医の医療水準の確保は、開業医自身のみならず、患者にとっても重要な問題である。開業医が研修に参加する際のバックアップ体制も含めた環境づくりが求められる。

## おわりに

中医協の調査等にもあるように、病院勤務医の過重労働は深刻であり、現在の最優先課題が、病院勤務医の過重労働緩和であることは明らかである。そして、そのためには、十分なしっかりとした財源の手当てが必要である。

同時に、今回の調査から、開業医も過重労働、精神的ストレスにさいなまれており、経営状態の悪化がこれに追い討ちをかけていることが明らかになった。開業医としての将来像を明確に描けないまま開業し、苦悩している開業医もある。病院であろうが、診療所であろうが、地域で「理想の医療」を追求する医師を失わないためにも、病院勤務医と開業医をそれぞれ評価すべきである。